「こころのふるさと」に出会う能登の旅

十村役喜多家

ない政治を能登で行いました。十村(他藩の大庄屋)、肝煎(庄屋)といった、村連合あるいは村びとの代表が、行政にも関わったのです。

能登には近世830余の村がありました。これだけ多くの村が成り立ったのは、山から海辺まで、見渡す限りの土地が利用でき、海藻類や魚類に富む海に恵まれていたからです。

能登の祭りの多さに驚く人がいます。あえのこと、堂ごと(中世から続く、村堂での祭礼)、キリコ、獅子舞、山車などです。報恩講料理をいただく仏事も含め、これらの行事は生活そのもの。よばれ(饗応)の食材は、風土に合った季節ごとの特産です。長年の経験から、「いざ」という時には命を繋いできた、大切な作物類でもあるのです。

あえのこと

村では、夏には塩田用の雑木を切り、山車を補強する蔓を切り求め、里山の日当たりが保たれるよう手入れをし続けました。きれいになった山では茸が採れ、栄養に富む水が川から海に流れ込みます。豊かな海藻や魚の寄りつく沿海も育てたのです。村びとたちは、塩田に利用した浜に大きな山車を曳き、翌年の塩づくりのために砂浜を均しました。春祭りには、道幅と同じ幅の太鼓山車を曳いて、道普請(村びとと協働で行う道路修理)を確かめました。

珠洲市若山町の太鼓山車

能登はやさしや土までも

世が落ち着いてきた17世紀の終わり頃には、加賀藩によって寺社由来や郷村名の由来などが調べられ、武士たちも頻繁に能登を訪れて記録を残すようになります。その最初の書物が『三日月の日記』(浅加久敬著、1696年)です。能登の御山・石動山に参拝しようと山道を馬で登った時、道案内の馬子の笑顔と教養に、「能登はやさしや土までも」と、心引かれたことが記され、この言葉が初めて紹介されました。

石動山

また、太田道兼は、能登の至る所に中世の説話に見るような伝説があることに驚き、『能登名跡志』(1777年)をまとめました。彼らは、長い戦国期と復興期に失った「ふるさと」に出会えた思いだったのでしょう。

「やさしさ」は、歴史・文化・光景、営み、苦楽、思いやりなどのすべてを包む言葉です。村人が力を合わせ、手入れを行き届かせ、営々と築き上げてきた土壌は、立ち止まる場所ごとに、「どうして、この風景がこんなに懐かしいのだろう」と感じさせるはずです。先祖が愛しんできた景観の中で生きる能登人。彼らがよく口にする言葉が、「おかげさま」です。小さく素朴なおかげさまから、希望や夢、絆、やさしさなどへと「能く登る」光景が語りかけてきます。

能登の旅は、こころのふるさとに出会い、それぞれの「私の物語」がはじまる旅となるに違いありません。